

終わりのしるしを順番を考察する

*** 塔 94 2 / 15 10 ページ 10 節『あなたの臨在のしるしには何がありますか』***
イエスは何か所かで幾つかの出来事を起きる順序どおりに述べておられます。英訳聖書では「それから」という言葉は、単に「それで」とか、「しかし」といった意味で用いられることがよくあります。しかし、マタイ 24 章 14 節の「それから」という言葉は、ギリシャ語のトテという副詞に基づく訳語です。ギリシャ語の専門家の説明によれば、トテは「時の指示副詞」で、「時間の点で次に起きることを述べるために」、あるいは「続く出来事を述べるために」用いられます。

ἔσται γὰρ τότε θλίψις μεγάλη οἷα οὐ γέγονεν ἀπ' ἀρχῆς κοσμοῦ ἕως τοῦ νῦν οὐδ' οὐ μὴ γένηται. 24:21

その時、世の初めから今に至るまで起きたことがなく、いいえ、二度と起きないような大患難があるからです。(マタイ 24:21)

Τότε ἐάν τις ὑμῖν εἴπῃ ἰδοὺ ὧδε ὁ χριστός, ἢ ὧδε, μὴ πιστεύσητε. 24:23

「その時、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに！』とか言う者がいても、それを信じてはなりません。(マタイ 24:23)

καὶ τότε φανήσεται τὸ σημεῖον τοῦ υἱοῦ τοῦ ἀνθρώπου ἐν οὐρανῷ, καὶ τότε κόψονται πᾶσαι αἱ φυλαὶ τῆς γῆς καὶ ὄψονται τὸν υἱὸν τοῦ ἀνθρώπου ἐρχόμενον ἐπὶ τῶν νεφελῶν τοῦ οὐρανοῦ μετὰ δυνάμεως καὶ δόξης πολλῆς 24:30

またその時、人の子のしるしが天に現われます。そしてその時、地のすべての部族は嘆きのあまり身を打ちたたき、彼らは、人の子が力と大なる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。

24:4以降のキリストの答えを見てゆくと、初めのうちずっと、「臨在」と「世の終わり」うち「終わり」にしか言及していません。

「戦争・・・」「しかし終わりはまだ」「・・・それから終わりが来る」と続いて、27節で初めて「臨在」に言及しています。

(マタイ 24:23 - 31) …「その時、『見よ、ここにキリストがいる』とか、『あそこに！』とか言う者がいても、それを信じてはなりません。24 偽キリストや偽預言者が起こり、できれば選ばれた者たちをさえ惑わそうとして、大きなしるしや不思議を行なうからです。25 ご覧なさい、わたしはあなた方にあらかじめ警告しました。26 それゆえ、人々が、『見よ、彼は荒野にいる』と言っても、出て行ってはなりません。『見よ、奥の間にいる』[と言っても]、それを信じてはなりません。27 稲妻が東の方から出て西の方に輝き渡るように、人の子の臨在もそのようだからです。28 どこでも死がいのある所、そこには鷲が集まっているでしょう。29 「それらの日の患難のすぐ後に、太陽は暗くなり、月はその光を放たず、星は天から落ち、天のもろもろの力は揺り動かされるでしょう。30 またその時、人の子のしるしが天に現われます。そしてその時、地のすべての部族は嘆きのあまり身を打ちたたき、彼らは、人の子が力と大なる栄光を伴い、天の雲に乗って来るのを見るでしょう。31 そして彼は、大きなラツパの音とともに自分の使いたちを遣わし、彼らは、四方の風から、天の一つの果てから他の果てにまで、その選ばれた者たちを集めるでしょう。

「ここに、あそこにキリストが」という偽預言が起きるとされる「その時」(24:23)とはいつのことでしょうか。文脈から明らかなおり大患難の後です。

その時に偽キリスト、偽預言者が起こるということは、その時点でキリストの臨在はまだ成就していないということです。

なぜならすでに成就した後では、偽情報によって惑わしようがないからです。

「荒野にいる、奥の間に」というのは、見えない、ほとんど誰にも自分ではそれを確認できない場所ということを示唆しているといえるでしょう。

それを信じるべきでないのは、「臨在」は稲妻が東から西に輝き渡るのを知覚できるのと同様だからということです。

この稲妻の例えは「荒野、奥の間」のように誰かに教えてもらわなければ分からない状況とは正反対の経験となることを示すために用いられていると言えます。

稲妻が輝き渡るのを気付かない人がどれほどいるのでしょうか。それを知覚するために、どんな知識や信仰が必要とされるのでしょうか。目が見えるだけ、あるいは耳が聞こえるだけで知覚できます。

つまり誰も気付かない人などいない。誰かに教えてもらわないと分からないような出来事ではなく、地上の人間、誰にも明らかになることだから、誰かが、どこそこにいると言ってもそれを真に受けてならないとあらかじめ警告されているのです。

「ここに、あそこにキリストが」という他人の言葉ではなく、自ら「確かにそこにキリストが」と認める時が必ず来るわけですから、「ここに、あそこに」という声は実際の臨在の成就する前にあがり、しかもその主張をもっともらしく見せるために「大きなしるしや不思議」な業を伴って挙がることになるということです。もちろんどれ程しるしや不思議があっても、それは偽物、偽情報ですから具体的にはキリストのしるしも知覚されず具体的なキリストの行動も見られることはありません。

しかし実際の臨在は「大患難のすぐ後に」「太陽、月が暗くなり」その後、稲妻が輝き渡るように人の子のしるしが現れる。つまり「人の子が天から来る(臨在する)」と書かれています。

(マタイ 24:36 - 44) …「その日と時刻についてはだれも知りません。天のみ使いたちも子も[知らず]、ただ父だけが[知っておられます]。37人の子の臨在はちょうどノアの日のようだからです。それゆえ、ずっと見張っていなさい。あなた方は、自分たちの主がどの日に来るかを知らないからです。44 このゆえに、あなた方も用意のできていることを示しなさい。あなた方の思わぬ時刻に人の子は来るからです。

誰も知り得ない「その日」とはいつの事でしょうか。

文脈を見れば「彼が近づいて戸口にいる日と時刻であることが分かります。

しかし、その前に大患難があり、太陽、月に異変があるので、キリストの臨在が近いことだけは、分かる人には分かるということです。

臨在までの順番があらかじめ知らされているわけですから、大患難が始まった時点では、キリストの到来は予測できます。

そもそも預言の終わりのしるしを認識できた時点で、それは予期できるはずで

ではその時点で「目ざめて」用意を始めても間に合うのでしょうか。

答えは「否」です。なぜなら、そうであれば「ずっと見張っている」必要などないからです。終わりのしるし、つまり前兆、前もって知らされている情報は「ずっと見張っている」必要がないようにするために与えられたワケではありません。

むしろ「ずっと見張っている」必要を明記させるために語られました。

と言うことは、「しるし」が認識されてから、「終わり」すなわち「裁き、滅び」まで、どれくらいか猶予があるかを物語ります。

つまり、しるしが明らかになってからでは、もはや「用意をする」ことなど到底できないと言うことを肝に命じる必要があるということです。

しるしを確認するとはすなわち、それを経験するということです。

ずっと見張っていた故に、すでに用意ができていて、「大患難」を忍ぶ強さを得、太陽、月の異変を恐れず、偽情報に惑わされずに終末期に突入できるようにするために、この一連のしるしをキリストは語っておられるのです。

「終わりの日のしるし」の順番を考察するというテーマでしたので、ここでまとめますと。

偽キリストー 大規模戦争、疫病、地震、食糧不足ー(苦しみの激痛の始まり)

なぜ「始まり」に過ぎないのか

トテ(その後) 憎しみの的、殉教、伝道

トテ(その後) 未曾有の大患難

トテ(その後) 偽予言者、~~ユセオステマ~~(すぐ後で) 太陽、月、星に異変、

トテ(その後) 人の子のしるし キリストの臨在、終わり

臨在の直前の天体異変の直前にすら偽予言者が、ここにあそこに荒野にと、人々惑わすことが分かります。その切羽詰まった、短期間のすぐ後に人の子のしるしが現れます。

当然、臨在の時に、ここに、あそこにという声を聞くことはありません。人々は「見る」からです。そして臨在の後には、偽予言者は二度と現れません。

これが福音書の順番であり、啓示の書とも基本的に同じです。

一言で言えば「臨在」までにどんなことがあるかを記すものになっているのであって、臨在から何が始まるかを記したものではありません。

「ものみの塔」の教理では、人の子の臨在が前もって人々に宣べ伝えられ、それから、人の子が、雲に乗って来ることもなく、目に見えない様で、しかし予測通り、その日と時刻に臨在し、その少し前に世界戦争が起き、疫病、食糧不足などがあり、長い年月を経た後、2度と起きない大患難があった後「終わり」つまりハルマゲドンが来る。という順番で物事が起きるという説明がなされています。

いわゆるまず「臨在ありき」ということですが、聖書の記述、とりわけギリシャ語「トテ」の調べると、これはあり得ないことが分かります。

1914年に臨在を開始したなら、少なくともその前に、「しるしや不思議」を伴う偽のキリスト到来の世界的規模の声、歴史上二度のないような大患難、比喩的な表現であったにせよ太陽、月、星などの異変が起きていなければなりません。

まず「臨在」から始まる終末のストーリーは明らかに聖書の記述とまったく食い違っています。